

平成28年9月21日

海外派遣の事前・事後学習、留学生との
協働学習の単位化について
(回答)

海外派遣の事前・事後学習、留学生との協働学習の単位化について

1. グローバル・コンピテンシー教育の背景

エンジニアのためのグローバル・コンピテンシーの定義は、世界の多くの高等教育機関で模索・検討されているが、その共通点として、専門的なエンジニア教育に加えて、1) グローバル教養（国際分野に関する教養）、2) 外国語能力、3) 海外経験、が挙げられると Lohmann 他(2015)は指摘する。本学においてもこの3つをグローバル・エンジニア養成（GCE）教育のコアとし、グローバル・コンピテンシーの涵養に力を注いでいる。

2. 日本の高等教育の現状

現在の日本の大学教育におけるグローバル教育の共通課題として指摘されるのが、日本から海外への留学者数の減少傾向である。その原因として「日本人学生の内向き志向」が強調されがちだが、学生の海外留学の阻害要因には、社会的、経済的、政治的なものも含まれる。具体例としては経済的理由や就職活動との兼ね合いが指摘されている（太田, 2103）。そこで、在籍する大学における留学生との協働学習は、社会的・経済的理由で留学できない学生に、多文化環境での学習・活動機会を提供する重要な役割を担っており、今日の日本の大学教育においては日本人学生と留学生が共に学び合う学習機会の開発・充実が進められている。

しかし、在籍する大学における多文化環境での学びは、ただ単に留学機会に恵まれない学生に対する応急処置としてのみ捉えられるべきではない。増々加速化するグローバル化に伴い、日本社会も急激に多様化しており、例えば学生が将来海外で勤務することがなかったとしても、日本の職場が多文化環境である可能性が非常に大きくなっている。海外赴任をしなくても、多様化する日本社会において、グローバル教養を有し、多様な文化を受容する力（姿勢）や多文化環境ならではの問題発見・解決力などのグローバル・コンピテンシーを獲得することは、日本で活躍するグローバル・エンジニアにも重要なことである。日常の中にある多様性を認め、寛容に受け止める力・姿勢、また日常の多文化環境における問題解決に取り組む力・姿勢は、異文化環境において自己能力を発揮できる力・姿勢と同様に、場合によってはそれ以上に、グローバル社会を生きる学生にとっては重要なことであるかもしれない。

3. 新たな教育方法

では、在籍する大学における留学生との協働学習で、最大限にグローバル・コンピテンシーを獲得するにはどうすれば良いのだろうか。一つの課題に対して多数の見方、解決方法がある異文化間教育あるいは国際教育においては、実体験から学び始める経験学習サイクル（具体的経験→内省的観察→抽象的概念化→能動的実験）(Kolb, 1984) が効果的であると言われており、現在の他大学の実践を鑑みても、体験型プログラムへの関心が高まっている。これは、21世紀のグローバル社会で求められるキー・コンピテンシー獲得のための教育と大きく関係していると考えられる。OECD が定義するキー・コンピテンシには、1) 異質な集団で交流する、2) 自律的に活動

する、3) 相互作用的に道具（言語、知識や情報、技術など）を用いる、の3つの要素が含まれている（DeSeCo, O. E. C. D 2005）。つまり、常に教員が課題を与え教授するのではなく、多文化背景を持つ学生たちが自主的・自律的に課題を設定し、あらゆる道具（言語、非言語、知識、情報など）を用いて、課題を共に解決する力を身につけることが求められており、これらのコンピテンシーを涵養するために、体験型学習が活用されているのである。

本学において留学生との協働学習を実践する際には、本学の定める GCE をバランスよく獲得することが促せる内容であることが重要である。そこで、ただ単に英語によるコミュニケーション力を高めることに留まらず、グローバルな課題について理解を深め、またあらゆる道具を用いてグローバルな課題について議論できるようになり、さらには、グローバルな課題解決のために、自らの専門分野の知識・技術を活かせる態度を涵養することを目標とする。

グローバル協働実践科目で涵養する GCE(学習目標)

	学習目的	学習目標
多様な文化受容	持続可能性への理解	日本にある持続可能な世界へ向けた共通課題を理解できる
	多様な文化理解	日本の文化多様性を理解できる
	グローバルな関係性理解	日本と留学生の出身国、さらに世界規模の相互関係を理解できる。
コミュニケーション力	自己認識	異文化コミュニケーション実践に際し、適性を自覚し対応することができる
	エンパシー	異文化と接する際に共感し対応できる
	アサーティブ・コミュニケーション	相手の意見を聞き自分の主張もしながら合意点を見いだせる
問題解決力	情報収集	自らメディア・文献を用いて情報収集判断し課題解決のために調査分析することができる
	多文化協働ワーク	多様な背景を持つ人々とともに共通の課題に協働して取り組むことができる
	合意形成	自分の意見と、他者の意見を出し合い最適な合意に導くことができる
持続的学習力	自主学習	グローバル社会を理解するのに必要な知識を得るために自主的に学習することができる
	継続学習	協働学習体験後、その後のキャリアに向けた学習課題を設定し学習できる
	語学学習	客観的語学力を自覚し能力を伸ばすために自己学習を続けることができる
グローバルな志向性	自己認識・自己理解	自分を見つめ、グローバル社会の一員としての自己イメージ、自己認識を持つことができる
	多様な文化の尊重・寛容性	多様な価値観を持つ文化や意見にオープンな態度をとることができる
	キャリア認識	グローバル環境における自己認識を持ち、目標と理想に向かって自ら学び続けることができる

協働学習教案①（フィールドワーク有りの場合）

	項目	レポート課題	学修時間
1.	オリエンテーション		1.5
2.	異文化適応セルフチェック 学習目標： 1. 多様な文化的背景を持つ集団でのコミュニケーションについて留意事項を理解する 2. 自分のコミュニケーションの傾向を分析し、理解する 3. 協働学習を通してみにつけたい多文化の受容力、コミュニケーション力等について各自目標設定を行う	自己認識	1.5 +1.5
3.	グループワーク演習 学習目標： 1. 演習を通してアサーティブコミュニケーションについて理解を深める 2. アサーティブネスを意識してグループ討議を実践する 3. ディスカッションに慣れる		1.5
4.	グローバル教養（持続可能な世界を目指して） 学習目標： 1. 持続可能な社会の構築のためのグローバルな課題を理解する 2. グローバルな課題にも様々な見方・考え方があることを理解する 3. グローバルな課題を選び、調査計画を立てる	調査企画案	1.5 +3
5.	協働学習準備（班分け、スケジュール確認、企画など）		1.5
6.	協働学習 Day1（協働学習） 学習目標：		6
7.	1. 持続可能な社会について理解を深める		
8.	2. 地域社会の課題を「持続可能性」の視点から分析する		
9.	3. 分析ツールを理解する 4. グループで協働して調査学習計画を立てる		
10.	協働学習 Day2（協働学習：フィールドワーク） 学習目標： グループで設定した課題について地域社会の現状を、分析ツールを用いて調査する テーマ（例）： 北九州市の持続可能性と課題、北九州市の多文化共生の現状と課題、等		8
11.	協働学習 Day3（協働学習） 学習目標：		6
12.	1. 調査結果を元に、地域社会の現状・課題をまとめる		
13.	2. 発見した課題について、解決方法を討議し、提言としてまとめる 3. 調査結果と提言を他者に伝えるためのプレゼンテーションを作る 4. 調査結果をより広いグループと共有する		
14.	振り返り（まとめ） 学習目標： 1. 留学生との協働学習から獲得した GCE を内省する 2. 留学生との交流からグローバル課題について理解が深まった、認識が変化したこと等、発見したことを発表する。 3. 今後の目標設定を行う。	調査結果報告 GCE 成果報告	1.5 +10
15.	成果発表会		1.5
		合計	45

協働学習教案②（フィールドワーク無しの場合）

	項目	レポート課題	学修時間
1 巡目			
1.	異文化適応セルフチェック①：初回指導 学習目標： 1. 多様な文化的背景を持つ集団でのコミュニケーションについて留意事項を理解する 2. 自分のコミュニケーションの傾向を分析し、理解する 3. 協働学習を通してみにつけたい多文化の受容力、コミュニケーション力等について各自目標設定を行う	自己認識	1.5 +1.5
2.	グループワーク演習①： 学習目標： 1. 演習を通してアサーティブコミュニケーションについて理解を深める 2. アサーティブネスを意識してグループ討議を実践する 3. ディスカッションに慣れる		1.5
3.	グローバル教養講座①：多文化共生社会 グローバル課題としての「多文化の受容と課題」を理解する 日本の多文化共生の現状を理解する 日本の多文化共生の課題を理解する 「多様性」をテーマにした調査計画を立てる	調査企画案	1.5
4.	協働学習①：「多様な文化の受容」 学習目標		6
5.	（留学生の出身国あるいは日本）国内にある文化多様性を知る		
6.	様々な多文化共生の課題を理解する		
7.	多文化共生を実現させる方法をグループで討議し、まとめる 自分たちが取り組める多文化共生について発表する		
8.	振り返り① 学習目標： 1. 留学生との協働学習から獲得した GCE を内省する 2. 留学生との交流から「多文化共生」について理解が深まったこと、認識が変化したこと等、発見したことを発表する。 3. 次回の協働学習の目標設定を行う。	GCE 成果報告 調査結果報告	1.5 +6
2 巡目			
9.	異文化適応セルフチェック②：上級編 1. 異文化感受性発達度について理解する 2. 自分自身の成長段階を分析する 3. 協働学習を通して伸ばしたい多文化の受容力、コミュニケーション力等について各自目標設定を行う	自己認識	1.5 +1.5
10.	グローバル教養②：持続可能な社会 学習目標： 1. 持続可能な社会の構築のためのグローバルな課題を理解する 2. グローバルな課題にも様々な見方・考え方があることを理解する 3. グローバルな課題と技術の関連性について理解する 4. グローバルな課題を一つ選び、調査計画を立てる	調査企画案	1.5
11.	グループワーク演習②：Group Discussion 1. 自分の意見を述べることの重要性を認識する 2. 他者と意見を出し合い最適な合意に導くことができるようになる 3. グローバルな課題について討議し、その内容も合わせて学習する 4. 英語でディスカッションすることに慣れる		1.5 +3

12.	協働学習② 学習目標：		6
13.	1. 持続可能な社会について理解を深める		
14.	2. 身近な社会における持続可能な社会構築のための課題を発見する		
15.	3. 発見した課題の解決方法について、グループで意見を出し合い提案をまとめる		
	4. 自分の意見を多文化背景を持つ人々と共有する		
	5. グループの提案をより広い聴衆と共有する		
16.	振り返り② 学習目標： 1. 2回の協働学習経験を経て自分の変化を内省する 2. 留学生との交流からグローバル課題について理解が深まったこと、認識が変化したこと等、発見したことを発表する。 3. 今後のキャリアを意識した目標設定を行う。	GCE 成果報告 調査結果報告	1.5 +6
まとめ			
17.	成果発表会		3
			合計 45

備考

1. グローバル実践科目は選択必修科目であるため、海外派遣に関わる科目の事前教育と同等の学習内容を必修とする。
2. 教案①、教案②は学部、大学院の共通科目とする。
3. 45時間の学習時間をもって1単位とする。